

Title	新東亞文化建設としての世界暦の採用について (時と暦の特輯)
Author(s)	井本, 進
Citation	天界 = The heavens (1941), 21(240): 185-188
Issue Date	1941-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/168202
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

丁度此の時、火星よりの訪問者は時計を視て、次の内遊星急行（偶然に筆者の火星上の友自身と同様、本統に存在するものである。）乗車に殆んど間がないのを知つて、走り辭去した。筆者は簡単な火星曆の事を考へ乍らも、吾が地球上に世界曆協會案に基づく尙ほ一層簡略で而も優秀な曆を採用するに至つて居ないのを遺憾に思つて居る。（A. S. P. Leaflet 95. 佐登兒譯）

新東亞文化建設としての 世界曆の採用について

會員 井 本 進

いま肇國以來未曾有の聖戰遂行の時に當つて、特に痛感せられるのは、我が大和民族の從來の生活様式が、文化が、思想が環境の支配を受けて、概して規模大ならず所謂島國氣質——此れは一面に於て學國一致の非常時に當つて一心團結の美風ともなるのであるが——に禍ひされて海外進出の機會を屢々逸して來た。たゞ史上に見られる僅かの英雄偉人が之れを企てたが、半途にして挫折し、或は一旦の成果を齎したが、民族の弱點たる此の島國的氣質に禍ひされて、後續維持することが出來ず、あたら一場の英雄的壯舉の夢に終つたのは甚だ遺憾である。

之からは今迄とは全く違ふのである。我々日本人は從來の考へ方を捨て、須らく新しい立場から事物を觀察し、判斷し、行動すべきである。

勿論從來の常識や經驗は重要なものではあるが、新東亞建設の大業を興すに當つては新しい亞細亞大陸に住む新しい大和民族であると云ふ自覺と確信とを以てすべてを推進せねばならぬ。從來の傳統に慣れて因襲に囚れることは、つまり興亞の聖業の後續たる基礎を失ふことになる。

× × ×

過ぎし昭和6年九月18日支那兵の柳條溝滿鐵線爆破から起つた滿洲事變、近くは昭和12年七月7日の蘆溝橋事件に端を發した此の支那事變は、亞細亞の黎明に高鳴るエボツクの鐘である。亞細亞統治の革新を告げる警鐘でもある。宿命的に先づ軍事行動が採られたのである。次で占領地域は宣撫工作が、又經濟工作が、出先軍の手で着々行はれて居るのである。其の次は文化工作である。此の經濟文化の革新は今後來るべき新時代に最も要求せられる處のものなのである。

× × ×

最近支那に行つた人から、よく聞く話であるが、『北京と言はず、上海と言はず、廣東と言はず、今日支那大陸に於て皇軍の威力により、蒋介石政權の支配を脱した所は、皆一様にわが日本と同じ東經 135 度の標準時を新時刻として、公式に用ひて居る』(山本一清博士、大陸と時刻制)。そして從來支那の同じ地方で用ひて居た東經 120 度の標準時を舊時刻と呼んで居る。之に對し新時刻を日本時刻と呼んで居るのであるが、此の時刻の正午は日本の正午と同じ時刻であつて、舊時刻は夫れより一時間丈遅れて居るのである。つまり日本の正午には、舊時刻は午前 11 時なのである。そして未だに大部分の支那人は舊時刻を用ひて居る。人が時刻を尋ねると、新時刻か舊時刻か何ちらの時間ですかと聞き返す。つまり二つ時計がある譯で一時間違ふのである。

だから只時刻を聞かふものなら、汽車に一時間も遅れて終ふことがある。

之れは天津で聯銀券が行はれて居るのに、未だ法幣が横行して居るのと變りがない。そして此の矛盾不便は當分の間過渡的時代として、各分野に於て不可避のことであらう。一日も早く新時刻の獨り流通する日の來ることを望む次第である。

× × ×

我々が今、日常つかつて居る曆は、グレゴリオ曆といふのであるが、本邦では明治 6 年の曆から泰西先進國に習つて之を採用した。其の昔、華かなりし羅馬帝國の大政治家ユリウス・シーザが、舊來の曆に弊害のあることを知り、根本的に改正せんと志し、結局エジプトに行はれて居た太陽曆を採用したのであつた。これが所謂ユリウス曆と稱せられるものであつて、今を去る約 2000 年の昔紀元前 46 年の事であつた。此の曆は平年を 365 日とし、4 年毎に閏年を設けて、閏年には二月に 1 日を加へて其年を 366 日とした。

ユリウス曆の一年の長さは約 $365.\overset{\text{H}}{25}$ であるのに、一太陽年(太陽が春分點を出發し、再び春分點に歸る迄に要する時間)は $365.\overset{\text{H}}{2422}$ ($365.\overset{\text{H}}{5}\overset{\text{M}}{48}\overset{\text{S}}{46}$) であるから、ユリウス曆では約 128 年で 1 日、或は 400 年で 3 日遅れることになる。此の缺點があつたため、羅馬法王グレゴリオ 13 世は、グレゴリオ曆を制定、西曆 1582 年十月 15 日から實施したのであつた。今世界の大部分の國が、此のグレゴリオ曆を用ひて居るが、ユリウス曆に對し、之れを新曆と云ひ、ユリウス曆を舊曆と呼んで居る。

グレゴリオ曆では西曆紀元年數を 4 で割つて、割り切れる數を閏年とし、4 で割切れない年と、100 で割切れるものゝ中 4 で割切れない年とを平年とするのであつて、要するに閏年の置き方が違ふのである。徳川時代の大阪の曆學者麻田剛立は、此の閏年の置き方を研究し、消長法と名づけて居たが、外國から來た

グレゴリオ曆書を始めて見て、自分の方法と同様なのを知り驚いたと云ふ。

グリゴリオ曆では、400年間につき1年の平均の長さは365.2425となり、一太陽年の長さ365.2422との差は0.0003であるから、約3000年間に1日丈け天の運行と合はなくなるのであつて、ユリウス曆に較べて餘程正確な曆となつた。

× × ×

だが併し歲月は流れた。人々は傳統とか因襲とかに就いては無關心である。最もいゝものゝかの如くに思つて居る。それが假りに陋習であつても、斯う云ふものだと思へられたものが、最もいゝと思つて居るのだ。月に28日の日があつても、29日の日があつても、そして又30日と31日とが、不規則に交互にやつて來ても、夫れが最もいゝもので、當然の事だと思つて居る。

果して夫れでよいのか？ 再吟味すべきである。

× × ×

現在、日本は全亞細亞の指導を引受けねばならぬ立場となつて來た。文化工作の一端として、日本がやる仕事としては、此の不便の多いグレゴリオ曆を廢止して、世界曆を卒先して採用し、世界最高の文化を東亞に樹立することが必要なのである。

此の世界曆は西曆1903年に獨逸のフォン・ジハルトといふ軍人が作つたもので、即ち1年を4期に分け、各期を91日即ち13週として、之を31日、30日、30日の三月の4半期に區分し、1期の始めの日は日曜日、1期の終りの日は土曜日となつて居て、各期を通じて年々同一曜日である。そして平年は十二月30日の次に1日を、更に閏年には六月30日の次に一日を付け加へて、週外の日として居る。そして1ケ年の總日數、閏年の置き方はグレゴリオ曆其儘で變更はない。

此の世界曆は最良の曆として國際聯盟にも提出討議されたが、唯宗教的關係の爲め、今猶採用される處までに至つて居ない。併し支那・トルコ・ブラジル・チリ・ペルー・ギリシヤ・ハンガリ・メキシコ・ノールウェー等の14ヶ國が此の曆を使用してもよい旨の意思表示を既に發表して居るのである。

× × ×

假りに此の世界曆が行はれた場合を想像するに、直ちに社會・經濟・法制特に商取引上、契約上に影響する處が大きい。三月31日、五月31日、八月31日及び十二月31日と云ふ日が、世界曆では無くなるから、誕生日の無くなる人々が出来るとし、既に取決めてあつた契約期日が無くなる場合も生ずるであらう。然し斯る場合は其の次の日を誕生日と定め、又契約期日と定める等の方法を採用せばよい。そして戶籍簿及契約書類等の訂正變更金利の計算等相當煩雜なものが生ずるであらう。

然しグレゴリオ曆と世界曆との日數の相違は極めて少く、下表の通りとなる。同時に

其の優劣が一目して判るだらう。

		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
月	グ曆	31	28(29)	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31
	世界曆	31	30	30	31	30	30(31)	31	30	30	31	30	31
四半期	グ曆	90(91)			91			92			92		
	世界曆	91			91(92)			91			92		
半期	グ曆	181(182)						184					
	世界曆	182(183)						183					

又昭和2年の金融恐慌以來、制定せられた銀行法により、現在全國の銀行の營業年度は一月から六月まで及七月から十二月迄となつて居て、曆年度と合致して居るが、其れ以外の會社・工場などは大部分營業年度が上の通り曆年度と一致して居ない。例へば決算期が四月と十月のもの、五月と十一月のものなどになつて居るが、此の世界曆採用の曉には、四半期と合致させる必要があるから、營業年度を銀行と同様の決算期に変更すべきであらう。之は一例に過ぎないが茲に附記する。

要するに世界曆とグレゴリオ曆との日附の相違は、僅か1日か2日のことである。皇國3000年の將來を思へば此際一時の不便困難を忍び、一新斷行すべきであらう。

× × ×

次に現在用ひて居るグ曆の一月1日は、殆んど無意味の日で、只年の始めであるからと云ふので祝つて來たのであるが、理想としては冬至か立春の日を歳首とすべきものなのである。

天文學上は冬至を歳首とする方がよいが、神武天皇が樞原の宮にて御即位の式を擧げさせられた皇國紀元元年一月1日即ち辛酉年春正月庚辰朔の日は、立春の頃であつたから、立春を歳首とする方が、我國のためによいと思ふ。立春を歳首とすると、春夏秋冬の四季は世界曆の四期と全く一致することになる。此點非常に好都合である。

然し之れは世界曆を實施の上何年かの後に於て、改めて第二段として採り上げ考究さるべき問題である。(皇紀2599年六月18日誌)

時の記念日を迎へて要望す

私は時の表現法に興味を持ち我國民一般が現在慣用しつつあります處の“時刻”と“時間”の表現法の混用を避け、時刻と時間との用途を明確にすべしとの所論を抱く者であります。